



門 八 呂 六  
番 1686  
2

種文庫 信濃奇區一覽卷之二目錄



雜食橋  
物草太郎  
詭譎全亭

安曇郡之部

三光石  
青島異鳥  
宮城巖窟  
鬼殿石

水内郡之部

善光寺  
紅葉窟  
大鼓岩  
水内橋

飯綱山  
志垣  
機織石  
弥太郎滝

貂鼠  
白骨温泉  
登波離橋

戸隠山  
石炭  
猿丸  
貝石





臭水油

大蜘蛛

地震滝

つらな堂

四山一望

端蔵主

野尻湖

信濃奇画一覽卷之二

安曇郡之部

雑食橋

雑食橋、梓川より筑摩安曇郡の坂あり橋の長十八間とぬ又四重やて梁柱あり南橋場村関隘ありて飛渡間あり北橋場村むいし所小岩とふ女と歌負くして人よはあはれ此地小橋と架まるとぬぐひ胡夕の食物を喰ふべき米穀をのけりて常あり生常とまつき物とを食へしつりし金銭を橋と架初とて信たり信は雑食の橋と号くと云ふ六十二年に朝とて改造す此辺の方云小橋本は水梁と云ふ水梁之本を引架をては橋場の方より女子の偶人を伴て橋の方へ車を扱はるは是は波の女は海に初し收と人小信て旧例と



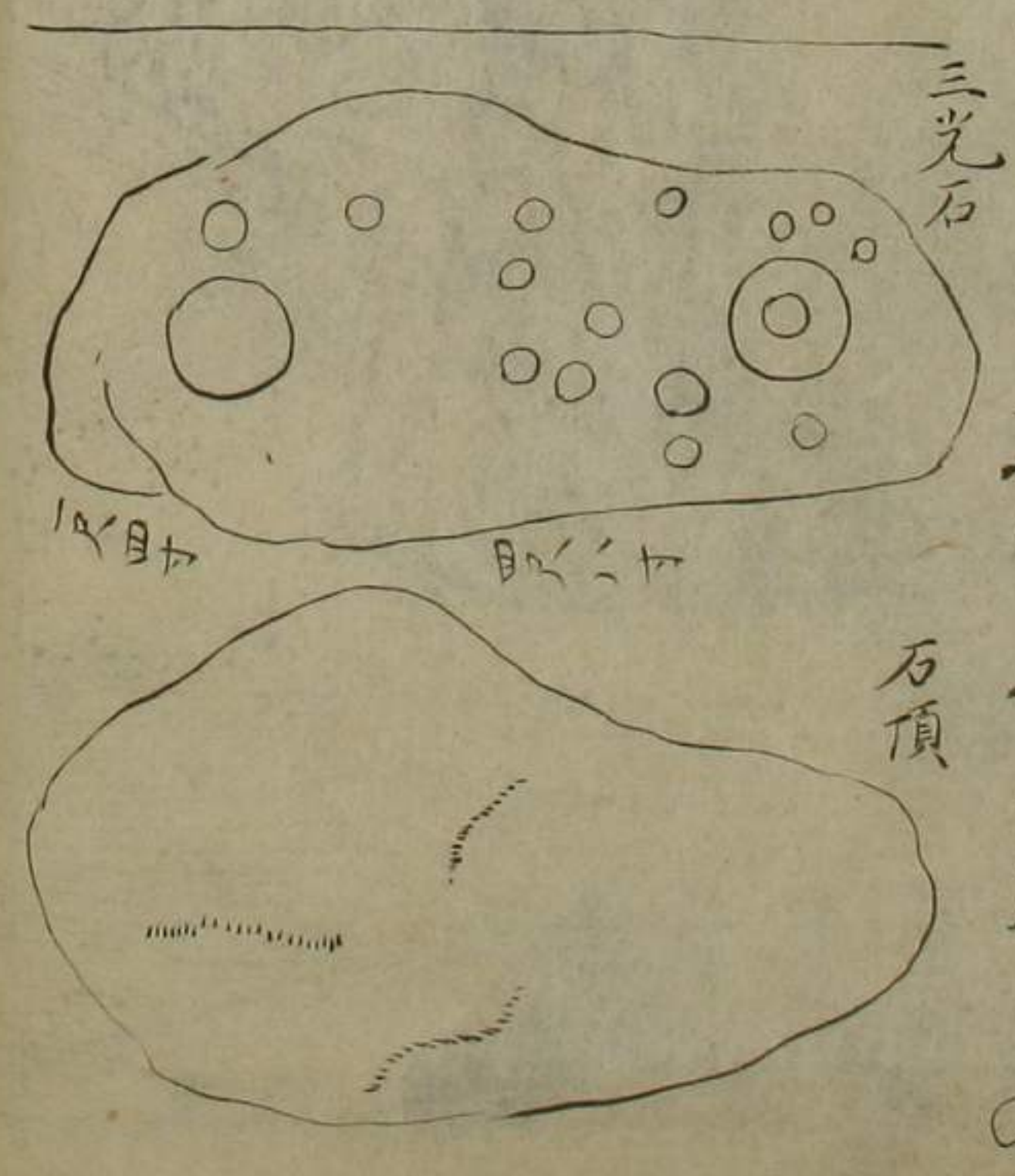




あるものなり又次次小西より去る里子の偶人と推して偶人を晴  
 明と名づけし馬帽子直垂の姿ありあきらかにたゞそれをも向ふは安  
 晴明の奇術を能く能人の死に重とすを活し異人と指揮し秘符を押  
 定符を法しりゆかるといふ湯仰我大願も其神胎ありん成統  
 せんつゆいともそれより晴明と祈念せし故ありとも梓川平目さばりの  
 水もあはれと云ゆる水もあはれと云ゆる故よ  
 橋を架を所あり二里りて橋有ととも  
 かの水もあはれなれば橋ありては通路  
 なるに地あり

三光石

為村小三光石名はる石あり其光河



東より推揚て或民家の庭よりあきりりゆきありて今山麓に推揚て  
 石質白く黄色小大小の圓形ありは日月星の三光と云月ありとも  
 色淡くして中小流き圓形あり上面より垢をばくすは蛇の形と云  
 貂鼠

文化四年六月鴻巣の異獸とて松本産敵は具狀の如く長一尺  
 六寸其色黒くして白き所あり尾は長く短く鼯鼠の尾の如くは松本の  
 本草家米岡は尋しに是ハ貂鼠と云ふもの尋常の鼯鼠の類なり其の  
 朝鮮國の名産也倭國にトツととてやと朝鮮より渡りて其の本朝  
 あも多し奇と云ふは日かより出づるはなほ不白班あり  
 白きハ銀貂鼠といひ黒きハ黒貂鼠といふ嶋あり  
 和名抄小黒貂唐韻云貂有黃貂黒貂出東北第黒貂



和名布流木とあり又延喜式

ゆゑ此和名あり保氏物産橋

花の暮暮二少少まきのまきのの度度長長とあり

これなり

### 藤橋

雑食の橋より一里余り梓川を

沿り稲核の里なる橋あり土人

の白鳥一過小橋あり後其を数

十筋の深一橋の細き其をこか

らび申究わく西端より橋の

及び底に松二枚を並へ浦に木

懸崖より西の河原廣く低

故に二丈余の篋木を立て横

木に高さをわけて又より平地

より若く橋を架して道と人

里人荷物も負ひてゆく

と傳へるなり

遊蕩事人あり揮ふ如く

歩を遊むるあり

### 稲核

### 藤橋



此里の人家の裏山の麓に風定あり定をくわを種て室寺室の如くは橋

と並内の吹出るといふ人々も月食物を入る毎に鳴ひを響せしむ

### 青嶋異島







とこしふけふい水鳥あて鴨の類々をえゆれとも足短なれはあぢあぢ  
りび深山幽谷の原鳥あて鹿を食ふなり一匹のふ勝あるはふ  
戴勝の類ふれとも戴勝の勝の形もこれと異あり又鳥の類も戴勝を  
鶺鴒あての類あれこれとふくまふ遠く漢名も和名も不知とり又  
このも旧年も青鳥あてとてふり外の所あは居るなり青鳥よの  
居るの稀ふなりふくまふ青鳥名と名つくとも

白骨竜穴

白骨の白舟あり此地小龍穴とて洞あり洞中石鐘乳の京多々万物これ  
に化せしめて愈石とある貝石色白く鹿品あて晒す骨あてあす故よ  
や今の白骨と呼ふけ此の温泉あて浴する人多くさもあてて人海  
絶る地あり造食の傍より大野川村より六里大野川より白舟温泉

雑

より三里あり嶺ふ嶺ありのあり嶺と云は間人の水あり牛馬通まび嶺人  
の行あはるを上人は背負ひて行あり多々女の業ありけ山路よりんわを  
とていふ湯川のの系もあふんえさう温泉の地あまらん川を隔るす  
とを行何処を来ると思ふ如しこれ龍穴れ左右密樹鬱鬱して  
目を遮る中を行つたああり龍穴を今人突通と云は洞一邱を貫き  
て湯川あふれ入て東崖のわは月も俛入く北の端と通れ水濁くして流  
れとて俛れ俛れ間二町なり内暗く西崖の明りかすふ水とを照をけけを  
出て南崖の當下に二尺三尺の鐘乳透るもあて下りて氷柱のとて瀉  
水のかさあて石とある昔のむあて石とあてるや冬ハ氷その俛  
石と所謂寒水石あり

物草太郎塚



穂高の岳六雲（六雲）とて連山左右に見立（見立）に穂高の神社（穂高の神社）保するの村（保するの村）す名神  
式名神大本社瓊（式名神大本社瓊）并尊 穂高見命 姓氏録曰安曇宿禰海神綿積豊玉彦神子  
穂高見命之後 古史記曰綿津見神者阿曇連等之祖神ト云  
信府統記と光仁天皇の御宇中房山の悪賊（悪賊）は辺を暴乱（暴乱）し神社仏閣を破  
却（破却）を桓武帝の御宇坂上田村丸（坂上田村丸）これを退治す文徳帝の御宇信濃の中將と  
まへ一人當社を造営す此中將其項當國の玉目（玉目）や仁明天皇の孫と  
かや又俗小物草太郎（俗小物草太郎）稱（稱）をうけんとす物草太郎物語（物草太郎物語）昔二位の  
中將とせし一子の信濃（信濃）に遷りし子ありと憂（憂）て普光寺（普光寺）に如  
來祈り一子とまゝしりて之とせしと云ふに二親（二親）みほりしれせしと  
られて筑摩郡（筑摩郡）の郷（郷）に里人（里人）ふと成（成）長（長）とて夫  
りあるとて都小の御（御）あがふの朝果（朝果）てうさ清水の辺（清水の辺）徘徊（徘徊）侍  
従（侍従）の局（局）とて女房（女房）とあつてそ夜七条の山（夜七条の山）の橋（橋）の此系（此系）の門（門）のやと

あひ入りしと作り又信濃の中將とありて筑摩の御（筑摩の御）とて百廿年の  
齡（齡）をたどりしとあえ後（後）小殿（小殿）おたり（おたり）の明神女房（明神女房）の朝日（朝日）の檀現（檀現）とありしと  
とふ今當社頭（今當社頭）の末社（末社）若宮明神（若宮明神）の祠（祠）此中將とありて社日の説（社日の説）す本  
社の後背（後背）塚ありこれを物草太郎（物草太郎）の塚とていけり

松本の西南一里余とて新村とて地（地）の上新村下新村其外東南北の  
五（五）りふ又属邑（属邑）あり地（地）むし物多を部（部）に任居（任居）のちといはれり  
しれ名轉（名轉）して新村と唱（唱）ありや又とて新の地（新の地）ありて  
地を推當（推當）し新の地と訓（訓）しや

宮城巖窟

有明（有明）の高く峙（峙）て士峰（士峰）の傍（傍）に似（似）たり依（依）て信濃の富（富）とて其巖窟（其巖窟）より流水  
わき中房川（中房川）流水の所（所）に巨石夥（夥）く飄出（飄出）して曠原（曠原）に石（石）落（落）り巖窟（巖窟）の



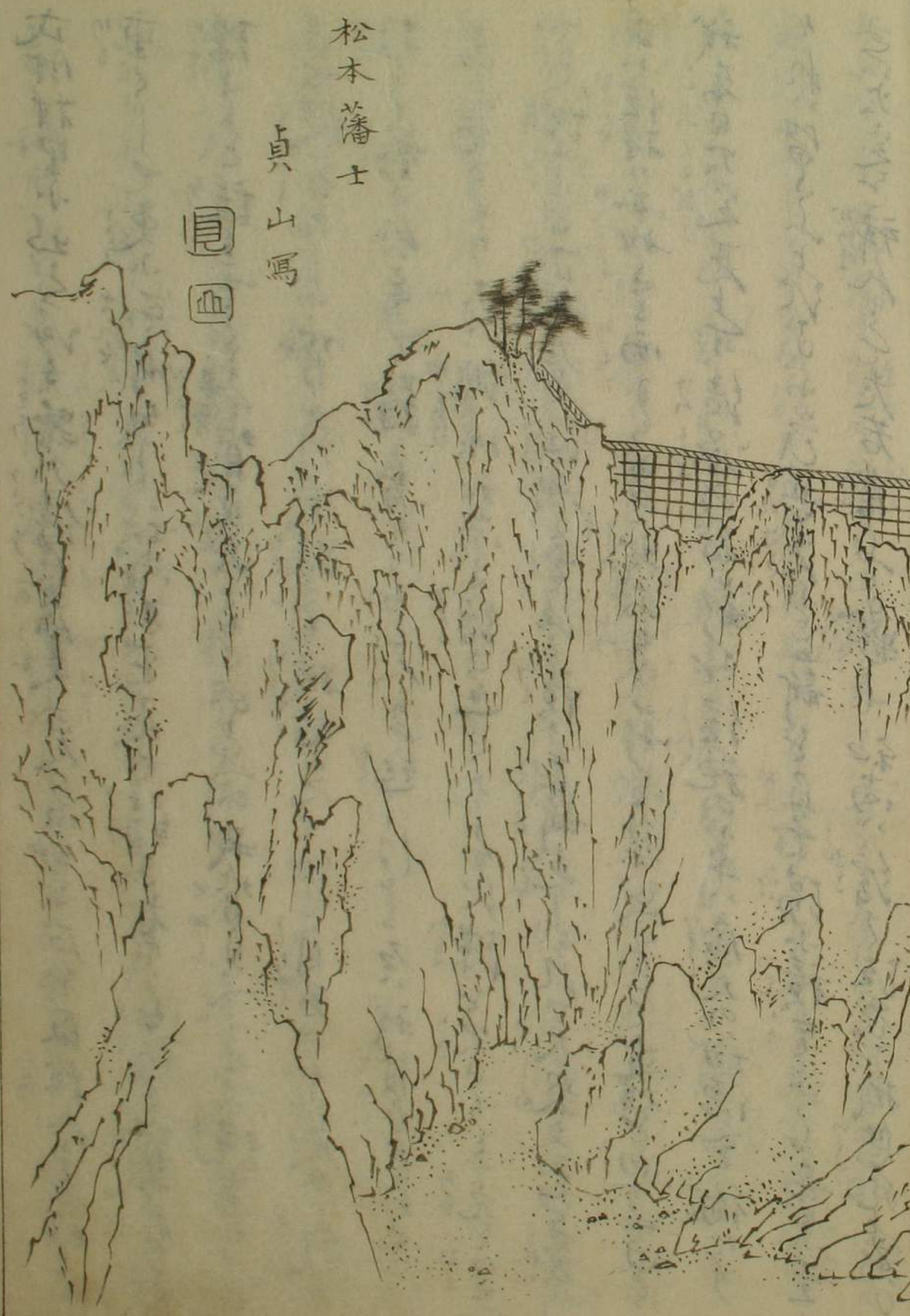
下と空をて窟とせし既諸所ありこれと小嘯の住し而とい官城小  
不動堂あり五龍山明王院と云北の山際一丁むろに魁首魏石鬼住  
しと云窟あり徑二間奥三間許頂は四間五間の平石ありてよ観音の小堂  
と云此地も田村丸の創立と云傳へり往古此辺の諸民鬼賊のく不恨されて  
困窮及びり下田村將軍退治の後百姓堵を安んじ怡ふあり報恩の  
為とて神社仏閣を所々建立して田村丸の建立と札を書て納めたる也  
り今にむと云ふ小田村丸は建立ありて開起せりと云傳ふる寺社多き此  
謂ふと一此賊一名八面大平らひ又魔道王と云呼しとや又魏石鬼  
の住しと云傳ふる巖窟所あり  
登波離橋 俗に渡蟻落橋と云  
又白豹の橋と云ふ  
池田より東一里半ありと過てと云ふの橋と云あり川方山中の村の通路

あり此地山骨箴箴として時一步も足と地へし所あり故小嶺原園  
を造りて往來す是と云ありと唐と云長三十間あり藤原の谷をカキ  
し此橋より入りて所あり身毛寒慄す然ると云土人の馬あり  
ありと曲子と云ひてと云ふ平地と一般の意用也是も王陽と云ふと云  
なり

訛譎全亭

駒沢村の神龍山大澤寺文明二年仁科弾正盛直絶方和尚を請て  
開山と云境内名區多し寺あり路古松夾の所を萬松園と云數十歩に  
して石仏あり其石小連理松ありて最も奇觀なり此と云路左方分  
偏正路と云く總て十境と稱して文龜二年絶方寂して嗣子乾更入王亭  
和尚流別龍卷寺より遷す是大沢の二代也世訛譎全亭と稱す

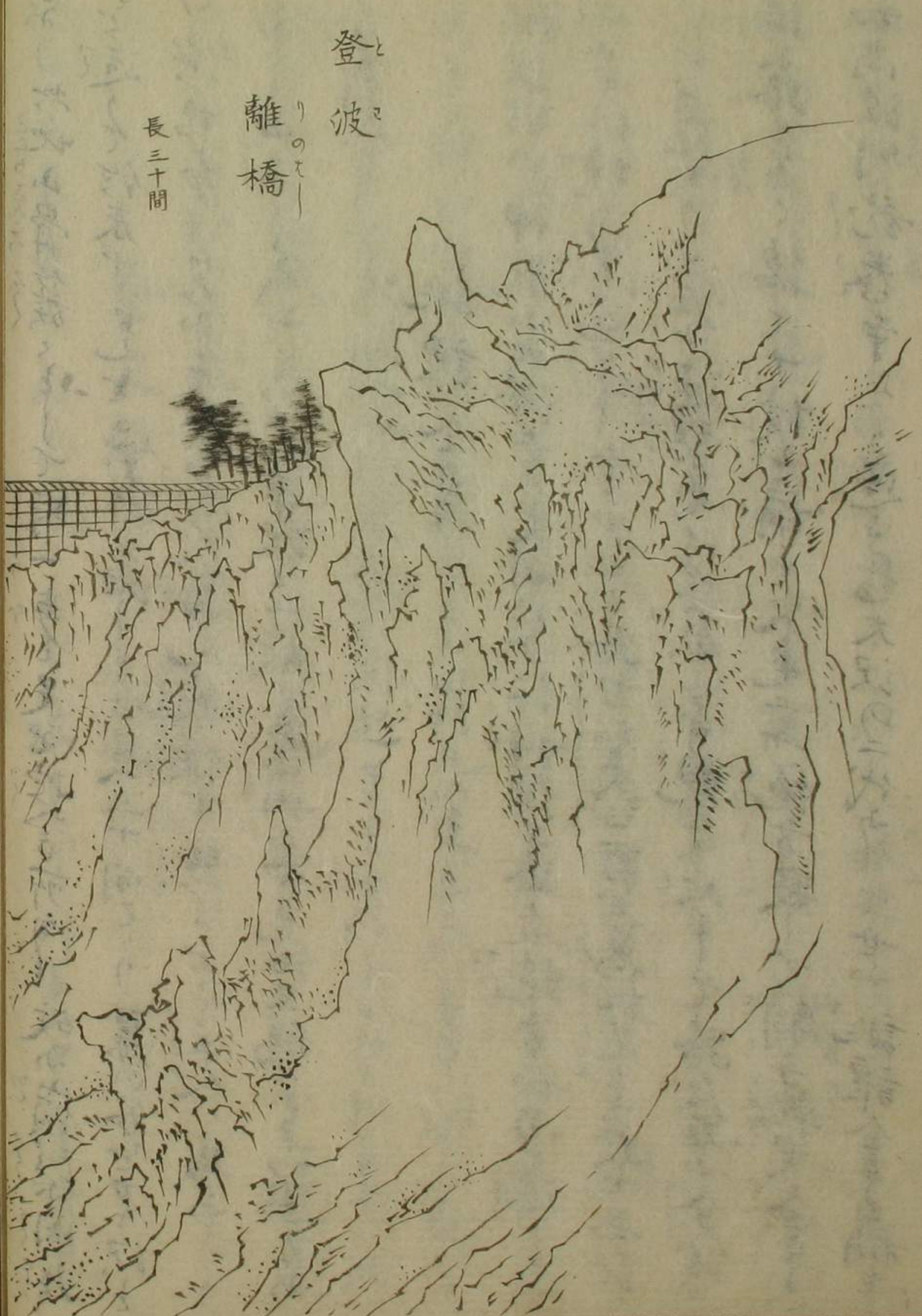




松本藩士

貞山寫

貞山寫



登波

離橋

長三十間



武村村果小出る海路の傍に農夫三人高なる石を取除くをそれをも  
重くして更小を湖あり和尚是とて弱き者なり何ぞ堪ふる  
除きと諸言々して背負ふと云ふは我背負ふとて鑑あつたけ  
させ徒客とて背負ひて踏踏と押し進みしそ自若り人カと我を  
推し動かされし弱き者なり人あて起しはるる石我背負ふなり  
と云ふなりありあは誠謙和尚の語をきくは火際と云ふなり  
とて理ありし一年冬の江湖を渉り積りて薪乏しれは大衆も是を憂え  
る小住持の安如し西より来て我を助し薪を集むしとて近村を廻りて曰く  
我來自火定せんす結縁のお勤を信施の輩は廣大の功德を徇たり  
れば皆くよむなり小住持昔先を新と負て歸り積りて其日に至  
るは火定を拜んとて老若集りて夥し和尚は縮く法衣を袂懸けと薪の

うふ咄し一足踏んき空をたまく曰今天より告りし今火定の時常北に因り  
是引せしとののめれの先今日止まりと揚をりて方交入れ肯て  
降しと又和尚の誰かしてそれと積りてのめれば半日の隙を費たりや  
西よりして降りしと云ふ影堂本像あり其時の形を彫りて行定をわけ  
いと園に空をたまく像の初の像なりとて後より改め作り古像は大町の天正院  
あつたなり

鬼 散石

高瀬川の水よ六鎗ヶ岳ヶ山岳岳の谷より出る大町より十里餘り川を沿  
山中に今所小敷敷るなりゆり形丸くゆるゆるありしとて潔白やと奇  
品あり大小あり小の米ありれ粟ありれあはと云大町に徑五六分なり鬼  
と稱せしなり琉球の属島又備中よりもつる石物なりとて鬼の



とつて絶品なり物として世にも又二匹類と本竹家の説あり

### 水内郡之部

#### 善光寺

善光寺ハ白王極帝の御宇伊奈郡麻績白河村より遷せ竹創と云此地善井  
和名抄水内郡白河八の月善井ハ伊奈井と有大坂坂ハ竹井と有或云竹井ハ以テ其假名似たり云  
湯乃ハ辺井水境気ハ穢り而して水を井と云といも井小轉れり云詳  
本堂南に向南北二十九間三尺東西十五間高十丈柱数百三十六本

#### 四辨

東 定額山善光寺 南 南命山無量壽寺  
西 不捨山淨土寺 北 北空山雲上寺  
今天台大勸進淨土大本願 外四十六坊 衆徒二十坊妻戸十坊 中衆妻帯十五坊 領子石條縁

起ハ塩囊沙少也有盛衰記平家物語等も其略文あり其説上ありと云  
水内郡ノ名置しをり以來星五粒六百三十餘年されども其始を考ふと云

治承三年三月廿四日天災焼亡 文永五年二月十四日類火 應安三年四月四日火之上  
應永三十四年三月六日火之上 文明五年六月四日火之上 寛永十九年五月九日火之上

元禄十三年七月廿一日火之上

土人の説小其外上都合三度ありと云

縁起小百濟の齊明王より奉と云表文小純金三光三尊阿彌陀如來の像

長一尺五寸服士親善菩薩得大勢至菩薩長各一尺同奉副經論幡蓋云  
日本記小欽明天皇十三申十月百濟国より釈迦佛金銅像一軀蓋若干經卷を

奉と有元享親書もこれと同し是ハ佛法の初てあり佛の佛像あり佛道ハ

釈迦佛より始ると云へり釈迦佛の像と唱へり之ハ元禄五年申三月十日  
御政開帳あり佛舎籠の棟札に應安三年とあり如來の重六貫三匁五説書

佛の重八百七十匁有りとあり

#### 如來印文

俗に御判と云し清印あり五月七日曉天より十五日迄詣  
人の額に押せし御判と頂くと云し群集するの影り別て自己の刻まると云  
堂内人又人小立燈籠に塔我えおと集し重苔辨眺多最のまはと云し是ハ十五







飯繩山

飯繩山いづな保食神ほくじくのかみを奉るなり山巔さんぜん之本祠もとみくらあり園をんに巖石いんせきを積つて風雨かぜあめを除のく心

祈いのちの者常とこふ矢やの繩なはを社領しゃりやう百石善光寺ぜんくわうじより一里いちりをりて荒宅村あらいやくむら小里祠せうりみくら

戸隠とがくまで一里あり山道やまみちは卯峯うみねより北きたへ十四五下りて方十歩かたじふほをりての間濕地まづちありけし

渾まて粟飯あひいの北きたへ大麦おほむぎの刻飯きりいも似にたり俗よこに餓鬼がきの飯いとくふ捕とく喫くむるふ

叫こゑひ妻つま飯い小こ那なもりなり飯い砂い奇きの坊ぼくあり是こゝよりて飯砂いを号なづけし相通あひたうあり

唐山たうざんと白石はくしやくあり者ものて喰くふと蕉氏せうし筆ひつし乘まりてふれども是こゝに喰くむるは

奇きも猶なほふありけりや神代卷かみしろと五穀ごこくの保食神ほくじくのかみより生同なまどう箕ひし疏そと保食ほくじくのハ

五穀ごこくと保食ほくじくとを又また倉稻くらい稻い鬼おにハ五穀ごこくの神かみは福ふくのハすありけり

倉稻くらい稻い鬼おに志し淵ふちとくふ會あひ持もちと喰くては氣持きもちとひ守まもりけり亂みだれを

とを喰く加かとを喰くて返かへし持もちと喰くて返かへしとを喰くて返かへしとを喰くて返かへしとを喰くて返かへし

神功かみこうおきてひととさありゆれはよの伊いの吳ごののこあくと二種ふたしゆと山やまありけり

ありとさ貝かい系けい氏し云い飯繩いづなハ叱おこ祇し尼に天あまとありけり著あき者もの圖ず集しゆ不知しらず定ぢやう院いん

般はん以いを深ふかきりゆりて大おほ杉すぎ坊ぼくとよ効きう驗げんの信しんとよまはの法はふをけり

小こ名な伊い狐この生なま尾おとけりるをとよりり鎮座ちんざ傳でん記きよき賀が美み多た

麻あの神かみ三さん狐こ神かみ同どう坐ざ神かみと有あり事ことの混まりて三さん狐この御ご食じき津つ神かみは

借か字じありけり

戸隠山

奥院おくいんハ本社ほんしや手て力りき雄ゆう命めい九頭くとう龍りゆう権けん現げんハ地ぢ主しゆ神かみを巖窟いんくつの中なに在あり毎まい夜や米こめ三さん

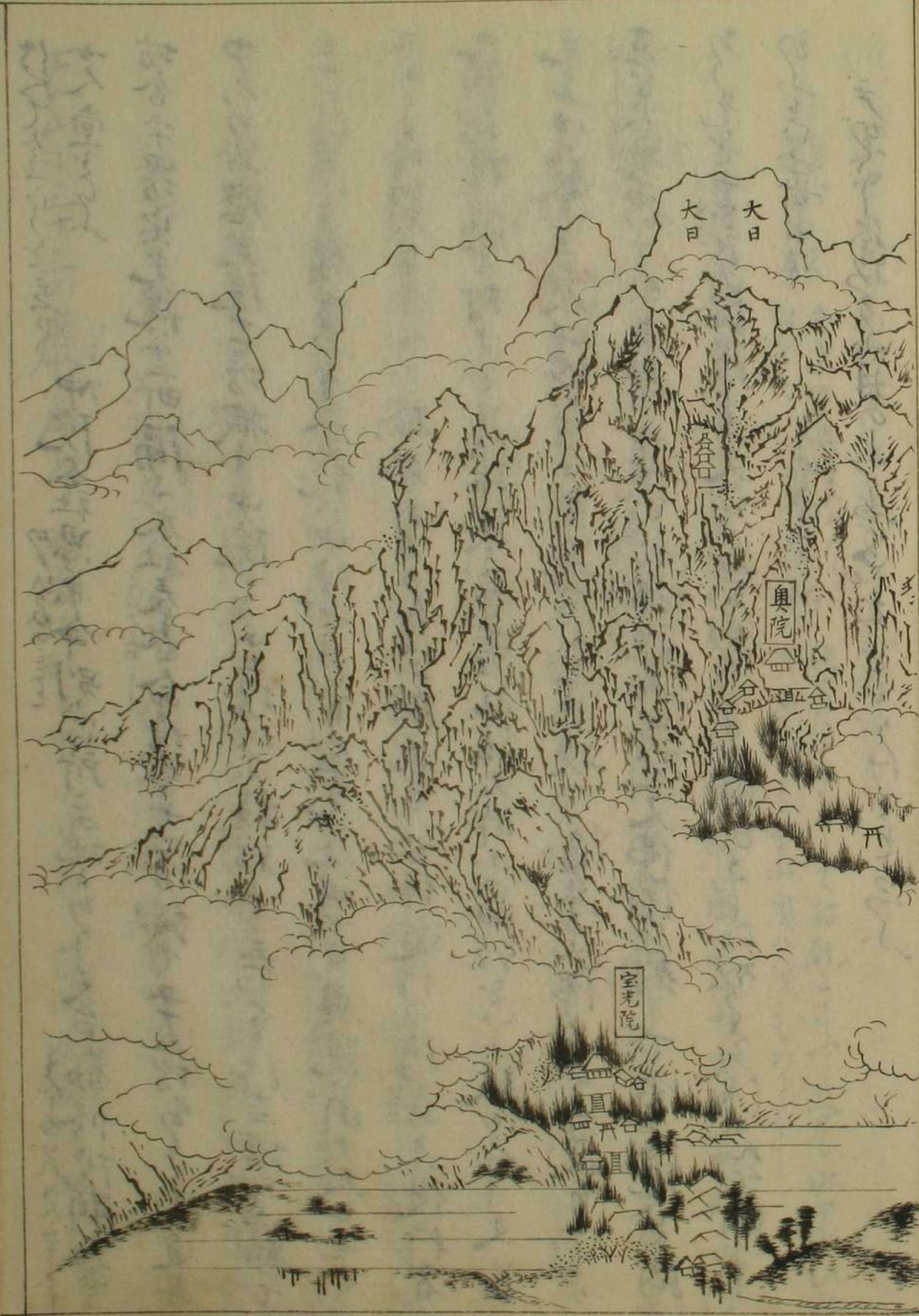
合あを炊いて一いち升しやうハ神かみ供くと三さん合あハ鳥とりの飼かひとす

二坊ふたぼくありとも一月いちげつの内うち朔望しやくぼう念ねん八はち日にち此こゝ三日さんじつの外ほかハ戸と隠かくりて

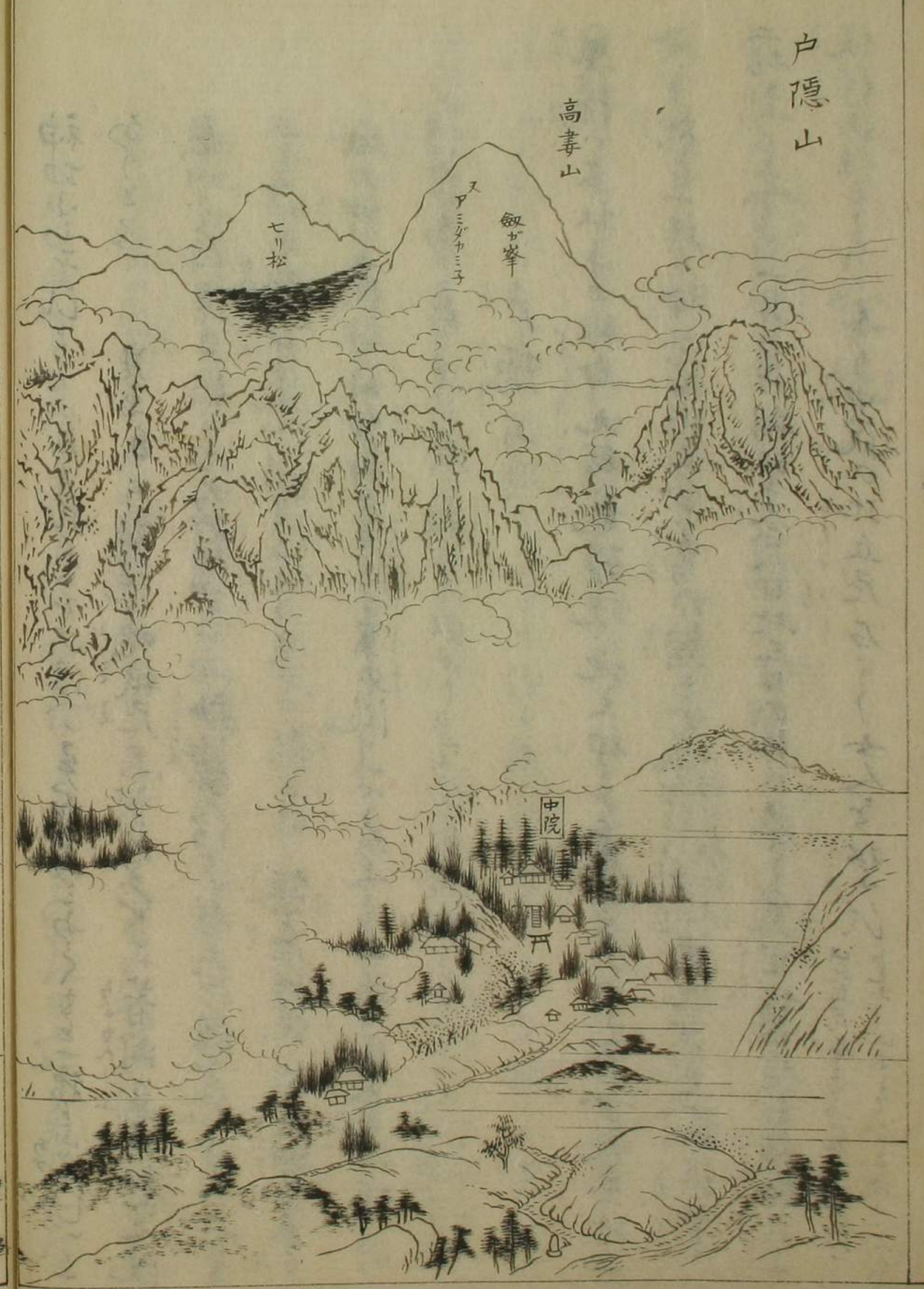
後あと傍そばの住すまむるのあり中院ちゆういんの北きた丘かみ石いしハ女人にょにんを栖すまふ

比ひ丘かみ石いしを昔むかし昔むかし僧そう強かぢやうて





戸隠山





傳くて今一うと云く  
女人堂と云ふ

中院本社おひらぬのこ命別當所まへあたりのところの地あり天台勸修院顯光寺

坊舎二十四坊宝光院十二所隔る本社表春命坊舎十七坊總て五十三坊あり一々近年

中ありて宝光院七坊減し中院より十三坊増し移転し三所を以て十三坊と都て

三十六坊なり領千石余祭礼ハ中院七月八日宝光院同日奥院同十五日中く

三日といた同式あり拾玖抄戸隠山顯光寺古佛遊行の所あり役行者えんのまじり

九頭龍控流と封すとつひ行基菩薩弘法大師おの口流を了故あり又兼

元年申親書大い地小百日氣の一日一枚つ自筆の佛名号百枚ありり

五箇火災ありて失たり中院の行指院具置之又佛像を刻て宝光院より

あり先と書置の御院と云又阿府おらなる月のさのりてびんて録し

ありと云哥あり戸かくし竹抄多ふ月のさふ心ありと云けと云ふ

大僧  
書  
冊

山中小あざの松万年くこといふものなり

形かたちの松まつ 五箇ふの這このぼ 萬年松マンネンマツ 松まつのこころやして枯乾くかんなるをとりて水中すいじゆ小ひた

五難ごなん但日楚にっしよ中有ちゆう万年松長二寸許葉は似側柏にがたけ藏篋ざんけつ筒とう中ちゆう或ハ夾冊あはさ子こ内

經きやう歲さい不枯取置沙土中以水すい流なが之を俄頃復活いつせきふくたつ不知其徒しらず出或云是老苔らうさい變成なると

中院ちゆうえん之の鬼女きよめ紅葉もみぢの毛けと色いろ紅黒べにくろとを縮ちぢむる毛あり長五尺ごせふあり

丸まるく痛いたむらして壺か中ちゆう小せう納なむ

和漢わくわん三方圓會さんぽうえんわい云下総國しんとうこく豊田郡とよたぐん石下村いしげむら東弘寺とうこうじ什物じぶつ中有七難しちなん之揃のぞろ毛色けしき五

采さい長四丈ちやうしゆじやう余有未あまりあり知何物なにもの也相傳あひたづな江州えしゆ竹生島たけなまじま信州しんしゆ戸隠山とがくさん亦有之またあり而為

什物じぶつ往古むかし有異婦あり名七難な具人陰毛ひとかげけ也蓋塵塚物證かみちんづかものあかし我竹生島七難

之毛け矣是亦以これ鮮あざ谷や為な宝玉たからぎ之類のるい但喜たがひ奇品きひん而已のみ

表山へつさん小せう二十にじゆの巖いわ窟くわくあり各岩おのづからの形かたちありて名あり百間長ひやくまな為なふ通とほ







信濃より信府統記に本曾義仲の二男後と系信濃守と云ふ人  
義仲討死の時、知多樋口次第、義塚を帝供して北辺に落ち、鬼之里安  
吹屋と云ふ所に落ち、後大塚村城を築き、后任を是と王野田殿と稱  
せりと云ふ

登戸隱山作哥

久光

子まをり。信濃の山。岩より。あつたふ。あつたふ。戸隱のふ。神乃山。  
さまのらう。うも神さび。神うらう。うもたつと。梓。さる。五音  
まま。伊多ち屋あつて。さうふ。富士の山。あつたふ。海。あつたふ。岩より。  
飯繩のふも。このふ。あつたふ。あつたふ。あつたふ。あつたふ。あつたふ。  
を。さつたふ。さつたふ。さつたふ。神の伊。あつたふ。あつたふ。あつたふ。  
あつたふ。あつたふ。

戸隱のふ。あつたふ。あつたふ。あつたふ。あつたふ。あつたふ。あつたふ。  
あつたふ。あつたふ。あつたふ。あつたふ。あつたふ。あつたふ。あつたふ。

紅葉岩窟

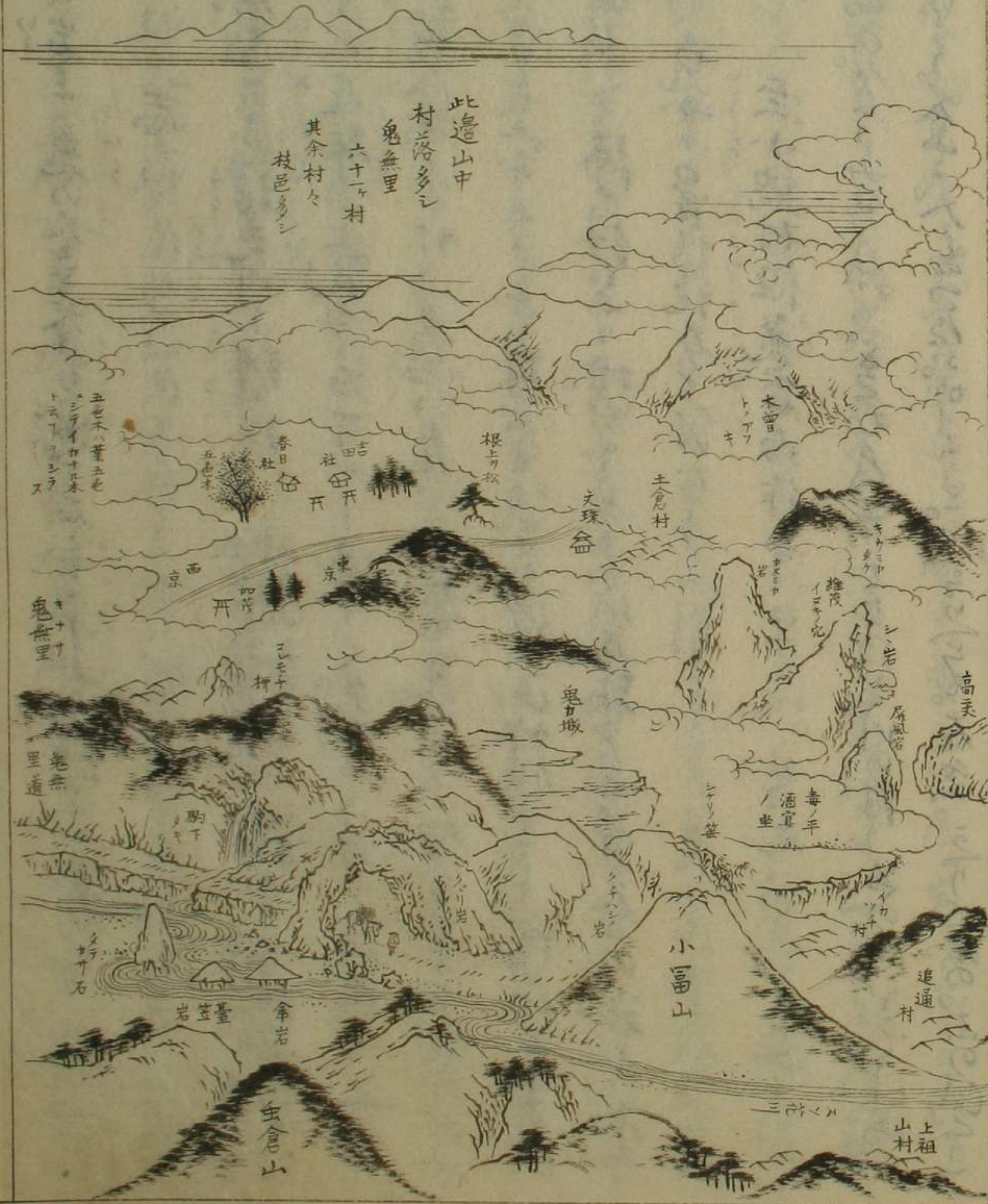
平維茂の退治せし鬼女紅葉は京都の官女といひ又平出の里の産ともい  
住し岩窟は荒倉の麓あり 岩穴口徑四三二丈奥深二間寢間といふ  
八〇センチ中八尺さうり三三センチ同いし五間計 戸隱  
り一里程隔り維茂は平兼忠の子貞盛の養子帯刀後五位上鎮守府の將軍世  
余五將軍と稱す天竺の信濃守ありと下向け地の妹賊と退治すといふ  
源頼義戸隱山の鬼を斬ると太平記に云ふは此の地なり維茂のこの傳  
古跡あり 維茂御日射坂の虎目鞍  
行岩口足跡石等あり 此岩窟の下酒宴の場と云ふ地を此紅葉  
將の諱いものふ據て其名ありい此龍舟とて長さ十間余の石舟あり常小  
舟あり絶ず又釜壇とて九尺四方の岩殿あり鳥井と云ふ釜壇明神と云ふ



山中  
名蹟



此邊山中  
村落多  
鬼無里  
六十一村  
其各村々  
枝邑多









第六風穴第七私雨ありは七奇半八開山の龍女は血脈を授けしより方便の流に  
 厚くけ地より戸隠へ延る田圃路の傍なる畑つひ幅四尺あり長さ十間許の  
 間馬さ若かりけ石を敷て火を焚きしは燐を硫黄樟腦の如しけ事此地に  
 人不知りして佐久郡大田部村の近平と云者一年筑前国に抵るに海邊より石炭  
 薪を採りてこの山中より石を砕きて馬に注ぎて買とる見よ干して  
 塩本の代とす奇ありぬるけありをばて置りて塩け地を通りぬる岩の黒  
 石筑紫の石も遠くは捨りて其夜山中の農家もさうて試よ火を合んよ  
 即燃く同物なりけ許をばてんた干漆のよとく真黒く光あり  
 烟の臭きと云これ臭水の油の氣ありと云えり久しく蔵を置る油床  
 減る故もやらりて透し此地從來新沢山あり所なきはりて新代  
 りいそと云も燐をばてんた干漆のよとく真黒く光あり  
 と云はるも方便の中よりたれ

北越七奇の中燐燐あり日本書記は天智天皇戊辰五月越国献燐土與燃水  
 云これ六焚土あり用水の溜池及田の沼よりけ田家の人切けて日は干焚土は  
 即燃く燐土は木竹根おふの油を流し置りて泥土のよとくありぬる物あり  
 と云りけ地の燐土もああり漆油の類自然よと云りて居て土中  
 凝塊せし物もいふ一甚多きをばてんた干漆のよとく真黒く光あり  
 貝原氏大和本草云石炭 其色如漆堅き如石シテ光アリ火ニ焼ハ席  
 ナテラス極テ明ナリ本草ニ在所ト同葉肆ニ岩乾漆ト云モノナリ云

大鼓岩

虫倉山大小ありて大虫倉小虫倉と云小虫倉の山上に虫倉明神の祠あり土人マ  
 この神ハ公時の女を祭れり因て阿岐明神と稱し  
 南留別志坂田の公時ハ  
 公節ナリ物部系國有  
 けり



二十町後隔く弱のる尾と云岩室あり山中と云く神と云る者ありてふ小く  
 尾の長と云ふ五丈と云るにたたりと云又山境の怪し窟と云二洞あり古洞幅十間深さ  
 十五間許山麓の果高あり其上数十丈の絶壁の中腹に今洞と云音下より仰る  
 と云其以前雪中より大なる足跡ありと云り  
 此山つと西の麓に大鼓岩あり高四丈程と云九三洞あり上の洞は登  
 るのあぐべ下の洞は二丈余の深洞と云深さ八九尺可忘の木の根を推して是を  
 折ると只折る鳴ず結縷草の根と切去ると折ると云る音高く響き大鼓を  
 折ると異なり此の根は固く俗にトドロ岩と云冬も夏も此山の葦試ふ折音と云  
 其葦の村に同近くゆえと終日鳴ひつとけ岩を折音あり彼の天台の石  
 鼓も外あり

機織石

戸隠の西山中下岩下と云里ありけ里の西すと花川の辺に機織石と云り打石炭  
 石炭石機織石と云るありと其形の似てをもち石と云つとけ地雨降をもちけり  
 くと音のきこるあり是を機織音といひせり此音中のやけ晴と云る音もいつ  
 くと音も二三日の内よる必る降ると云り素問陰陽應象大論云地氣上テ  
 為雲天氣下為雨

猿丸

同一西山中猿丸村と云あり往昔猿丸太夫は一所に居位と云ひ侍ふ又けり  
 出たると云り  
 和漢三才圖會云樺州菅屋村有猿丸太夫屋鋪豊前鏡山有猿丸  
 杖桑隱逸傳曰猿丸深草の人今と云く土人深草と猿丸の里と云何の人と云ふ  
 云く或曰元慶の間の人なりと或曰聖徳太子の孫と云削玉ありと世其然や云  
 を知るものか後に江の曾東の山中に隠る近江田上川を過り行くと二里余深上



より臨む処にて村民奉祠あり又その邊の岡も奥中と名つくる所あり後丸を  
 奥山と稱しと云ふ山は此と云ふ是後丸の初め稱して後江に移るなり  
 長明無明抄も田の上の下をうとす所も後丸を云ふとありと云ふ  
 歌道人物志曰く人をしてあくは後丸を言官姓時代不知之不可分明云々  
 清浦袋竹子も後丸家集の志すけのよめをとりての言ふ万葉も高市の連  
 黒人の妻の言とあり後丸黒人の妻の言とありと云ふ  
 加茂御名に云ふ人をもとむる或は元明天皇は比の人とありと云ふ日記  
 元武天皇  
 卷下柿本臣後丸十餘人小綿下の位を授けられ續日記  
 元明天皇  
 卷下和洞元年  
 後位下柿本朝臣佐留卒と云ふを名の進りれはひきせしやされ後丸の家  
 集して云ふ人今この京のこのさめを必あは人の跡もあはれり云々の  
 よめ人といふ後丸の作らるる名ありと云ふと云ふ

水内橋

水内郡より更級郡を坂より犀川を流れ岨に廣く地西岸の岩石河水は  
 夾て迫りしむる故に橋を架けて兩郡の通行を便しし神仙ありと云ふ  
 扱そらに云ふに西より東へ橋を造ると五丈四尺をれり曲て南へ海を  
 出ると九重なりて橋を築り長十丈五尺廣二丈四尺橋柱のまこと水  
 上と難事五丈余あり土人の檀本橋ともいふなり水内の橋と云ふ  
 の久米路橋と云ふ  
 又伊奈郡久米村より久米寺久米川あり  
 世川あり橋と久米路橋と云ふ  
 埋むるありしと云ふなり  
 大和郡同名有大和中池と云ふ  
 大和郡中池と云ふなり  
 一説は神仙の扱と云ふ日本記は推古天皇二十年百濟國より化率一踏子の工と云ふ  
 人ありしと云ふ西の海に渡り白く白麻の如くはれしと云ふ工の



勝

水内  
曲橋

百尺險崖千尺水  
長橋影動掛飛虹  
不知此勝誰能寫  
詩自絕言画失工

王瑾

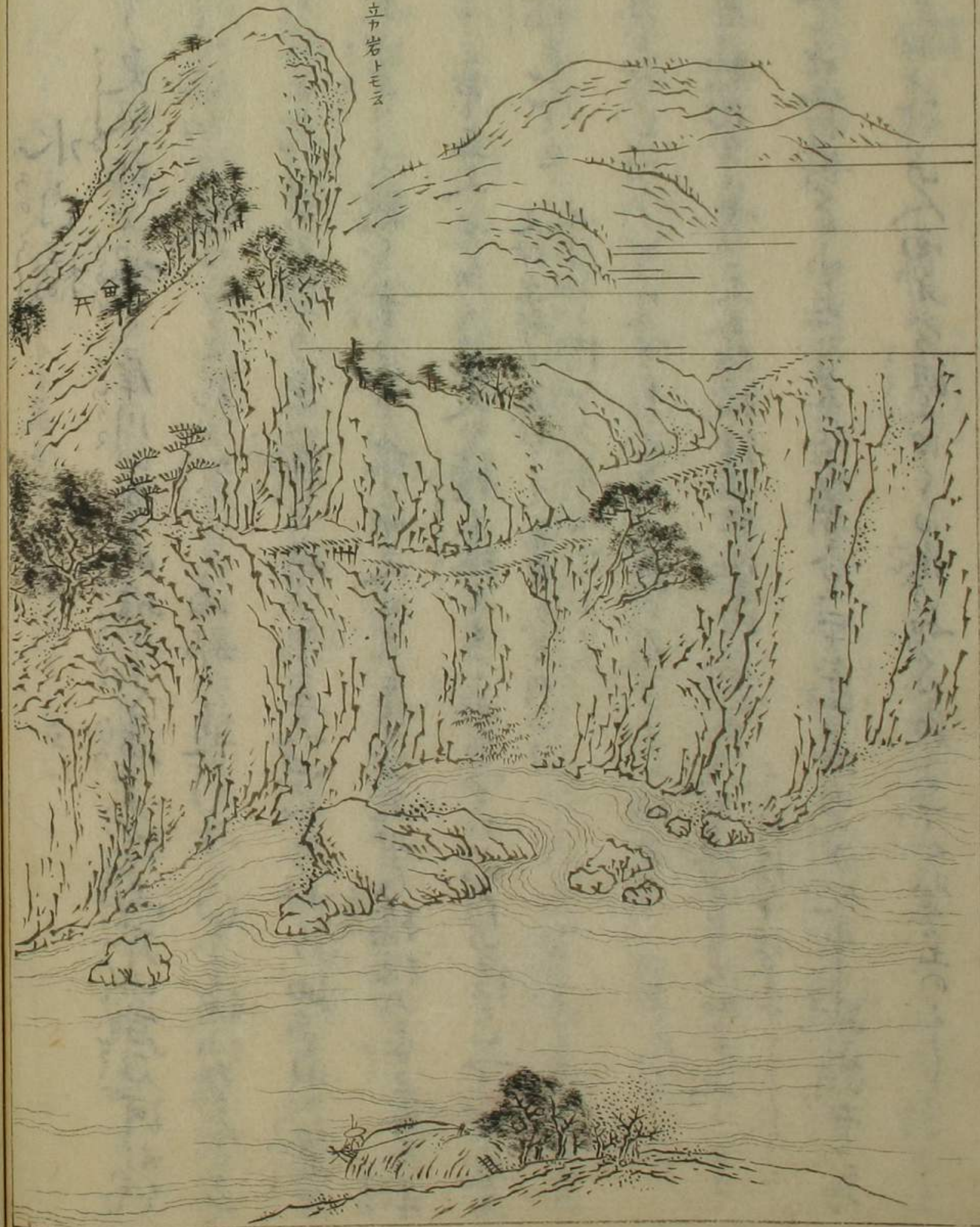
ツブラキ山

不動滝



日輪山

土人立カ岩トモ云









あり北越貝石を論して上古海磯の変遷を所の流り海國のこもあれへ  
山国の貝石の奇なりふへ

火井

宮野尾村の畠畔小地概とふ所あり方二間あり凹して六尺より此間生きた  
土ありつこの破目ありて常々地まこちあきけり一燂燂と火を懸して投せれば火  
ついで燭炎と燃ゆるる後水溜り泡立ち湯の煮るが如く火を投せれば水と  
よて火の燃ゆるる水のあき所も同じ火を消す松枝を以て積し薪の息を中より  
秋畠物の草の所は終夜火を消さばく鹿備の跡を先年地中を改んんと  
一丈余高き何の異あるもあらず六月其うを埋むた火の燃ゆることもあ  
り烟もあき香もあらず北越入方村の火も此類なり

臭水油

善光寺より北十丁余上松村の奥羊里より山路をへく川岸は方九尺の池に三壇と  
掘りて水中に流るる油を草につけて煮たり朝夕あなかり雨日  
三井あり晴天の日六斗より一斗五升より二十升許の草年中油を用く  
其色は常々赤く色黒くして臭いこれより臭水の油と云ふ北越東より臭水  
油は同一油の油の油と云ふ燃燈を燃せしむる故に油と云ふ  
古き布切を以て同て燃せしむる石脂水の名あり博物志に石脂  
石漆あり本草に石脂油又石油山油あり皆此類なり又臭水と云ふ地より油出  
されども小流るる油の臭水あり又戸狩村にて文政二年井の火を汲ぎし井中  
深くして暗れぬ提燈を下りたる所は臭水井中より火を汲ぎし井中  
もの唇色を焼くると土人云これ奇とす是も臭水油の意に中より火を  
汲りて燃せしむる北越の油を論してこれも又硫黄の油と云ふ数十年前松柏池





上松村

油井

ソルガ滝



奥水

油井

薬山  
浮乱堂

北郷村道

天狗岩

天狗滝

浅川  
滝

水車

押田村











松塔と題する惠端の印なり其臺石に彫て曰

師諱慧端號道鏡嗣法於至道無難禪師本姓源氏真田某甲度孽子

養于信州飯山先主松平遠州侯家十九出家參侍武陵至道菴主受

印歷參諸方親試法味菴主欲使舉住東北新道場師堅辭

還鄉共母道棲有陳尊宿之風城主請為建寺師不許只求安禪地

侯便賜境名小畝山正受禪菴師母為尼曰李雪有大智見師亦敬

畏吾白隱先師即得師正印者也并二世宗覺臨濟鏡水福泉定若

等同參禪受記師一生韶光不顯亦天下無知具名者師曾紹九祖

三生之志自喚栽松公羽享保六年辛丑十月六日晚書偈詠歌大笑而化

壽滿八十 未略 天明元年辛丑四月 法孫東嶺圓慈謹志

庵中著述の書若干あり惠端の真像一幅あり左右に狼を画す一は白隱の和文集めたる

遠羅天益と曰正受老漢は具里狼の教習もあらず集川で讎をせし時小所の

墓原に七夜を坐し明しりと是彼等頭筋耳の根を吹臭れしを時正

念工夫相續間斷しや否や矯一試ん為ありと申されし有り意を画たるなり

世よ名たゞる白隱の本師として名利をいとして道と懐き身を草莽に安めて此

伏居せし世の月奉膳捧閤間と誑嚇する者に視まへ天淵亭をすまは僧の口

をまじり少座

### 大蜘蛛

山に上り果飯山より西に下り隔ちて最幽なる僻地あり山里の月夜荒草とふ

ふりし山の崎々岨の此処彼処を居せりけ地は窮貧くして如き二人住る農民あり其

ふは男子あり偶病つきて間多し何居する所を以て探るなりそ煩悶者

しらりぬ側とてあはれ我子の病を看とるをもち居る母の月夜にんん



如くして日教を修むるも醫者堂の陰もく殊の之苦むむる油すぬぬか母も  
あつれが飯山と尾の神主小川氏の許よりて祈禱をい其れを陳の末より  
字貼るより後又外の方よりありて又有る處に於て敷のれを請て  
貼れども何れもあらずと云ふ如何とせしと獨にぬれどもはあつれ  
者病むる念かきも後現小母の目もつんきて陳に遠いことをそれとを捕  
とせし連も隠れてえんじのぬに什磨をぬを探あられ禱のすよと  
大なる蛛の溜り居ると云ふ其後押入るがあらう人かぬれは何れも所  
由あり暫くあらうふふは陳いあら通かやあらん老女の身は流を引纏ふ事  
幾年ともなく眼も腫まらぬまらぬ如くいあらとあるは梓と尾は持出  
あつれがうらな限りこころ小鳴る鄰をさき一丁許場てよ二町又下に  
一町ありあつれ居る者老女の鳴る声は孫もあつれが行ふ響といひしに

疾をうてんぬか老女の大なる腫を捕つて指にあらぬおとるを忘るて立寄る殊  
こも薬を悩むるをぬぬかをてあつれが家より免切てぬかせよ又此類をて  
あつれぬ大腫ありてこころあつれ二病もあつれ瘡ぬぬを渾身是瘦疲り  
血をぬれぬやん子體の皮新うとつれぬ黠一日敷終てぬか愈ぬぬ野尻  
温泉水入浴せんと杖をうて有る尾の小川氏も云ふと云ふ先か海軍中のぬか

一と小川氏語

又此地の山の頂岩窟の中小硫黄権現と祀る神祠あり下は又里祠あり其地は  
の石あり其石の下は蜈蚣多し中ふたあつれ六七すらすらと  
梅よけの地を賑うて冬目地を虫のぬぬかして年を磨るおろくもあつれ  
あつれぬぬかあつれぬぬかあつれぬぬかあつれぬぬかあつれぬぬか

白山一瞥





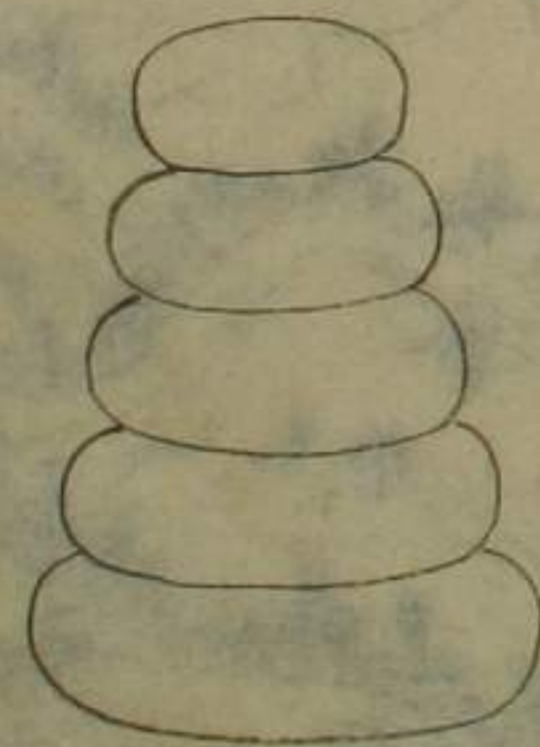


飯綱山

戸隠山



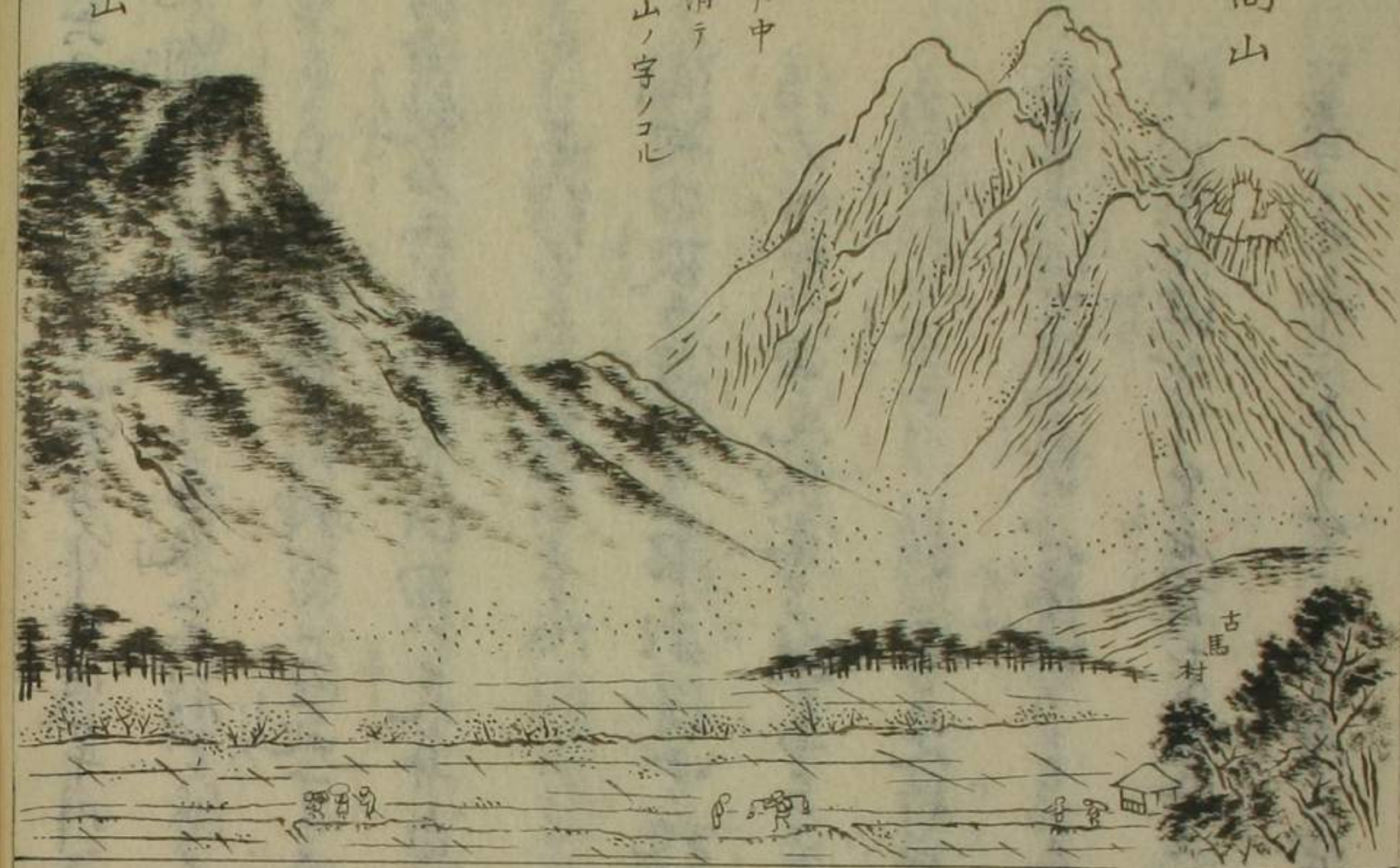
五行石ハ五色ノ  
ありて青黒ノ  
一石あり  
五ツ重あつた  
こしき故  
五行石と名づく  
こしき



黒姫山

妙高山

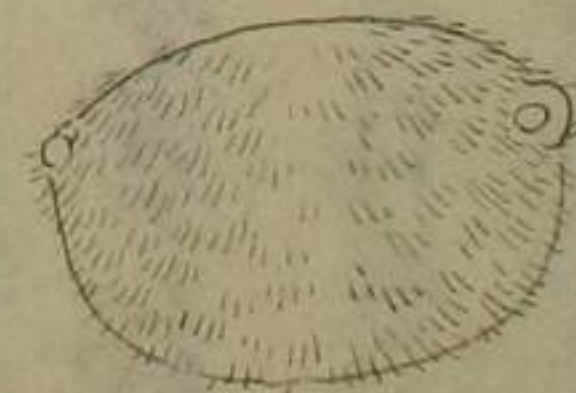
五月中  
雪消テ  
山ノ字ノコト



牛ノ玉徑ニ寸ハ  
平ゆつて毛あり  
毛ハ黒く白ニゆり  
光ありて南言ハ  
耳ノ如く巻あり  
毛ハあつたれり

鈍石ニ箇

青一枚  
黒一枚





野尻湖水

のむくのこまの  
南北三十余丁  
山陰に至て廣き  
こと倍せり

班山



三ツノ草

大崎

女天  
鳥井  
アキハ

天

心庵



女天嶋

小島中寺

湖水未  
関川  
流

真光寺

神明



のと揺れぬかぬかたの外の五三ありて疾漕を遊たううううをんれハニ  
 人八組合其ううう舟六水満くもた湖中沈ううう湖あ四十二年定行五十  
 六氣とと其後高光古塩月水結の者ありて湖中入く水中は底へくもくもを  
 引おとりのおとくありけ水中の本よりうく作きり一堂ありてまけ時より満く人え  
 舟六艘沈て有れ沈ては日陰ゆく引おとんとすれとも舟中沈て沈て沈て  
 少くとも是の端の如き人食物をぬかせる是と高光寺の東に埋れ石を  
 観音寺改宗の墓と云へり

地震瀑布

此瀑布はより水勢強くして大地震動はなほ俗に地震の瀑布と云信越の堰有  
 野尻より二里を隔て妙言山と云岨の間の川末関川に流す地懸崖千仞水急ふ  
 とく冷しき勢あり潭中へ落る音は多し大地を動揺せし崖甚碣碣故に猛然とて





解くわてほととめるたるた仰あや見まれの縹せう綿めんと無り如し湖つの徑けい百ひゃく合ごうとさるも百ひゃく同どう  
 たりあい湖はりんん合ごうをかりり落お幅はく八はち同どうとま其ま左さ右うをひ百ひゃく合ごうとまん毎年ねん  
 秋あき分ぶんをなくこれを不動ぶどう百ひゃく合ごうとしつたり相をなく濕帯しつたい半はんとなび又高たか原がはらを  
 呼よぶ所の急流きゅうりゅうはありり霧きり起お起お尺せき七しち尺せきとなり一丁ていとりも前は石となりあり  
 其ま邊へを考へられ早に早に村より新雨あまはりてとりく流ながるあり大おほきを  
 抗ありりく時の大い考起おりまるありとるとるとり戦いくさ師しの像也なり

此四字原本三別業  
 三ノ像ノ字子侍ノ字ニ  
 似レテ此讀カズ

信濃奇區一覽卷之二終



